



表紙写真/サガリバナ

CONTENTS

ご覧になれます。

- 1 **くがにくとぅば**[黄金言葉] vol.159
アジア最高のリゾート地は沖縄だった
株式会社アレックス 取締役会長 外間 晃
- 5 **地域リレーションシップ情報**⑮
沖縄総合事務局経済産業部の最近の取組について
アジアとの架け橋となるFTP
- 8 **トピックス**
2016年度の県内景況
- 10 **けいざい風水**
- 12 **最近の県内経済の動向**
2017年3月の県内景況
- 14 **国内景気動向**
- 16 **沖縄マーケティング情報**
①沖縄県内の事業所数・従業者数・人口・世帯数
②世界の中の沖縄(年次)
③グラフでみる沖縄経済
④数値でみる沖縄県・全国の経済動向(月次)
- 36 **経済社会のできごと**(沖縄、国内・海外)
2017年4月
- 37 **各種セミナー等開催インフォメーション**
- 38 **おきぎん調査レポート・バックナンバー**(分野別)
- 42 **ゆがふ編集後記**

アジア最高のリゾート地は 沖縄だった

株式会社アレックス

取締役会長 外間 晃



今回は、40年近く建築デザイン事務所の経営者として多数の沖縄のホテル&リゾート、商業施設、文化公共施設などの設計・施工に携わってこられた、株式会社アレックス取締役会長外間晃氏がこのほど執筆された『なぜ、世界のお金持ちは、こっそり「おきりぞ」を楽しむのか?』（東邦出版）を一部抜粋してご紹介致します。

外間氏は同書において、これまで観光にばかり目を向けている沖縄を、リゾート地としてあらたに捉え直し、早々に県全体で世界中の富裕層を受け入れる態勢を整える必要性を示唆しています。

沖縄は「観光地」という大いなる間違い

「観光地」と「リゾート地」は明らかに違います。観光地にやって来る「旅行者」は「お金」を使います。これに対してリゾート地を訪れる「訪問者」は「時間」を使います。観光地は「観光」がメインで、リゾート地は「滞在」がメインです。

ですから、観光者は観光地をいろいろと「周遊」し、滞在者は観光地巡りをあまりせずに、1ヵ所で「のんびり」するのです。

観光地とリゾート地の決定的な違いは、「一度きりしか来ない」か、「毎年やって来るか」です。ですから、経済的な価値もまるで違います。観光客は観光地を巡り、すぐに帰っていきますが、リゾート客は2週間も3週間もホテルに泊まってくれます。

また、個人だけではなく家族で毎年来てくれて、長い時間を過ごしてくれるのです。

長い目で見たら、どちらの経済効果が高いか一目瞭然ですよ。

今、多くの人たちが大きな誤解をしています。

沖縄は日本人向けの「観光地」ではなく、世界に誇れる「リゾート地」なのです。これは、

本土の人たち（ヤマトンチュ）もそうですが、特に、沖縄の人たち、（ウチナーンチュ）に知ってもらいたいとても重要なことです。

私は、沖縄の恩納村に生まれ、40年近く建築デザイン事務所の経営者として多数の沖縄のホテル&リゾート、商業施設、文化公共施設などの設計・施工に携わってきました。

私は建造物を勉強するために多くの国々を訪れましたが、どこに行っても沖縄以上のリゾート地はありません。これが地元びいきからではなく、本心からそう思っています。

私は「沖縄リゾート」を略して「おきりぞ」と名づけました。

「おきりぞ」は、間違いなくアジア No. 1 の高級リゾート地です。

世界の富豪はモナコよりカリブより沖縄を選んだ

世界に高級リゾート地は数多くあります。ニース、カリブ、カプリ、モンテカルロ、モルディブ、モナコ、カンヌ、タヒチ、バハマ、ハンプトン、パームスプリングス、ハミルトン、カンクン、マイアミ……。

ももとはバカンスの習慣を持つヨーロッパの人々が、19世紀以降急速に発展した交通網を利用し、自国の風光明媚な田舎や世界各地の植民地を訪れるようになったのが近代のリゾートの始まりです。

そのため、世界の伝統的なリゾート地のほとんどは、欧米人の手によって開発され、欧米スタイルで発展してきました。今も超高級リゾートとしてのステイタスを誇るの、こうした古くからのリゾート地がほとんどです。

そんな中、ここ10年までにわかに脚光を浴びているリゾート地、それが沖縄です。

今、世界中のセレブリティがお忍びで沖縄を訪れていることをご存知でしょうか？

世界の富の9割以上を独占する大富豪、各国に城や島をまるごと所有する特権階級、ハリウッドスターやプロスポーツのスーパースターなど、あらゆる贅沢を知り尽くした富裕層が、世界中からプライベートジェットでこっそり沖縄にやってきます。

本島のとあるプライベートビーチでトム・クルーズが寝そべっていた。ロスチャイルド家の当主が、クルーズ船でトロリングを楽しんでいた。シリコンバレーで有名なカリスマ経営者をゴルフコースで見かけた。

そんな噂がごく一部でささやかれることはあっても、ほとんどはそのまま騒ぎ立てられることもなく、島の時間はいつもどおりのんびりと過ぎていきます。

世界のセレブが大金を積んでも欲しいものは？

世界中のビジネスエリートたちが、沖縄にやって来るケースが増えてきました。ウォール街やシリコンバレーで、毎日を分刻みで駆け回りながら何百万ドルもの取引を行っている彼らのモットーは「よく働き、よく遊ぶ」こと。

何百万ドルのボーナスをもらって、年に2ヵ月の休みをもらってリゾート地にやって来るのです。そんな働き者のエグゼクティブたちは、いったいどんなリゾートライフを送っているのでしょうか？

実は、ただただ「のんびり」するだけ。それ

なら、わざわざ極東の小さな島まで来なくても、世界中に上流階級御用達の洗練されたリゾート地はいくらでもあります。

それでも、世界のセレブたちが沖縄までやって来るのはなぜでしょう？

求めているのは、「日常ののんびり」ではない、「極上ののんびり」です。彼らは、優雅な時間こそ、どんなにお金をかけても手に入れる価値がある最大の贅沢品だということを知っています。一瞬も気の抜けないストレスフルな毎日を送っているビジネスマンほど、リカバリー・リフレッシュを必要としています。

ですから、オフには最上級の「のんびり」に高いお金をかけるのです。

もっと切実に「のんびり」を求めているのは、どこに行っても顔を知られているスーパースターです。沖縄で、何が一番喜ばれるかという、どんな有名人でもプライバシーが守られる点です。

世界の有名リゾート地には隠れ家的な超高級ホテルやセキュリティ万全な別荘地はいくらでもあります。でも沖縄は、ボディガードなしで普通に外を歩いても安全でいられるのです。本島の田舎や離島に行けば、しつこいパパラッチも、すぐにスマホを向ける一般人もいません。

有名人であるほどプライバシーはないも同然、安心と安全を求めるのは当然です。

そして、セレブリティたちが「何もしない」で「のんびりする」ことができる陰には、沖縄だけの極上のやすらぎと高度に行き届いたきめ細かいサービスがあるのです。

これこそがリゾート地の理想型だと私は考えています。

「おきりぞ」を広めるために最もやっかいな問題

石垣島からフェリーで10分くらいのところに、竹富島があります。この島は「日本一美しい島」と呼ばれています。島の人口はたった365人（2016年7月現在）165軒ある家々は石垣に覆われていて、道には白い砂がまかれ、その道を観光牛車がゆっくり進んでいきます。島中に

緑があり、花が咲き、浜辺には島ネコが暮らし、星砂がたくさん取れます。

ところが、石垣島で乗ったタクシーの運転手は、生まれてから竹富島へ一度も行ったことがないというのです。「竹富に行くくらいなら東京まで行くよ」だそうです。

そこが日本一の楽園だろうが、世界中から注目を集めているのが、自分の生活圏からは離れた場所に行く価値も興味もないのです。

こんなとき、私はいつもじれったく思います。ウチナンチュはもっと自慢してください。もっと誇りに思ってください。自分の島の歴史も、文化も、自然も。

「おきりぞ」を広めるための一番の問題は、当の沖縄の人々が、自分たちの土地の魅力をよくわかってないことです。

ちょっと考えただけで、沖縄の魅力は十指に余るほど数え上げることができます。

温暖な気候。世界有数の珊瑚礁。抜群の透明度を誇る海。離島に残る手つかずの自然。島の人たちの長寿を支えてきた食文化。バリエーション豊かなマリナーアクティビティ。琉球王朝の歴史を伝える史跡。世界文化遺産に登録された遺産群があります。

島歌、エイサー、三線などの音楽・伝統工芸・織物などのファインアート。日本・アジア・アメリカの文化が入り乱れるチャンプルー文化。

どれをとっても、観光の目玉となりうる「4番打者クラス」の観光資源です。旅行者なら誰もが知っている沖縄の魅力に、当の県民が気づいていないのです。

土地の魅力を知らないで、外から来た人をもてなすことなどできっこありません。特に、沖縄の未来を担っていく若い人たちには、早いうちに外の世界を見てもらいたい。自分たちの沖縄がどんな魅力を持っているか、再認識してもらいたいのです。

東南アジアスタイルか、ハワイスタイルか？

「沖縄がこれからリゾート地として世界としてのぎを削っていくためには、どのようなスタイルを打ち出していけばいいのだろうか？」

私は沖縄をインターナショナルレベルでリゾート地にしたいという思いを抱いてから、どんなアドバンテージがあるのか、何を売りにすればいいかを考え続けました。

「沖縄は東南アジアを目指すべきか、ハワイを目指すべきか」

これが究極の選択でした。

欧米人を魅了するエキゾチシズムは、南太平洋から南アジアの島文化をルーツとしているのは確かです。

その一方で、県民は戦後アメリカの統治下に置かれ、アメリカの文化から直接的な影響も受けてきました。「フェンスの向こうは、もうアメリカ」という環境に置かれ、欧米人のライフスタイルを身近に見てきました。

アジアのエキゾチシズムとアメリカの洗練。両方の文化の影響も受けてきた沖縄はどのスタイルでリゾート化を目指したらよいのでしょうか？

私は、長い間その答を模索し続けました。あるとき、初めて沖縄に来た友人を迎えに那覇空港に行ったとき、空港いっぱい飾られた南国の花を見て言った彼の言葉に、ハッとしました。

「花は、訪れる人にとって最初のおもてなしだね」その言葉に、大切なのは沖縄を押しつけるのではなく、沖縄の心づくしでお迎えすることだと気づかされたのです。

「東南アジアでもハワイでもなく、沖縄独自のリゾートを造ればいいんだ！」私の中で答えが出た瞬間でした。

その後、私が設計やデザインで心がけたのは「沖縄の匂い、手触り感、田舎っぽさと洗練されたデザインを両立した新しい沖縄」でした。いかにも沖縄的な演出は避け、沖縄産の素材を使いながら、土地が生み出す斬新な美意識を形にしていきました。

世界のクルーズ船が沖縄にやって来る

先日、地中海クルーズに行ってきました。船は停泊地ごとの魅力を「いいとこ取り」できるのが最大のメリットです。

普通の周遊旅行なら、空港に着いて、ホテルにチェックインして、宿泊して、翌日移動する、そのすべてを夜寝ている間に済ませてしまうことができるのです。

目をさませば昨日と別の港に着いていて、街に出て思い切り観光を楽しみ、戻ってきたら豪華な夕食が用意されていて、就寝まで船内のカジノやダンスショーを満喫。

船には飲食店が14店舗もあります。さらにプールも3カ所、スポーツジムも完備。船室もコンパクトではあるけれど心地よく整えられ、悪天候でもほとんど揺れません。陸路の移動を思えば、ホテルと同じ居住性のまま、いろいろな街を周遊できるのは、特に年配層にとってはありがたいものです。

旅行に出かけ、沖縄のリゾート化を進める上でたくさんのヒントをもらいました。

沖縄は今、海の玄関口の整備に力を入れています。2010年には162回だったクルーズ船の入港が、2016年には450回にまで増加しています。しかも、50回ほどは、これ以上入れないと断っているのです。

沖縄には、有人無人に関わらず個性ある島々がたくさんあり、それらを見て回るにはクルーズが最適です。

船が停泊するバースの造成も急がれますが、これから目指すべきなのは「沖縄発着便」です。本当に経済の振興を考えるなら、クルーズ客が前日に入って1泊して、帰るときにも1泊する母港です。発着港になれば、たとえば7日の旅でも4日は船の中にいて3日は本島にいるという旅程が組めます。

現在の沖縄は、入港数は増えてもほとんどが通過港としての地です。

シンガポールや上海発着の船を沖縄に引っ張ってきて、那覇港・中城港・本部港・石垣港・平良港をそれぞれ発着とする独自のプランを作り上げていきたいのです。

ここを基点に、屋久島、西表島、奄美大島を周遊する「世界自然遺産クルーズ」や、台北や上海、廈門に寄港する「東シナ海クルーズ」など、夢はどんどん膨らみます。

【外間晃(ほかまあきら)氏プロフィール】

沖縄移住コンサルタント

株式会社アレックス取締役会長

1954年沖縄県恩納村生まれ。

1972年東京デザイン専門学校卒業後、株式会社アレックス(東京)入社。

1979年には、株式会社アレックス(沖縄)を設立、代表取締役社長就任。沖縄県内で多数のホテル&リゾート、商業施設、文化公共施設などの設計・施工に携わる。

現在、会社経営の他、沖縄経済界の活動と共に、世界に肩を並べるリゾート地である沖縄を知ってもらうための取り組みを行っている。

沖縄経済同友会 常任幹事

(環境委員会委員長)

商工中金 ユース会第12代代表幹事

沖縄県建築士事務所協会賛助会会長

那覇東ロータリークラブ42代会長

一般社団法人おきなわ離島応援団理事

関連情報 やんばるロハス

<http://yanbaru-lohas.com/company/>



2017年5月3日 初版第1刷発行

著者 外間 晃

発行人 保川 敏克

発行所 東邦出版株式会社

けいざい 風水

✦「おもてなし規格認証」制度

サービスの質“見える化”

沖縄県の産業構造は、サービス産業である第3次産業の比率が高いことが特徴です。内閣府の統計では、県内名目総生産に占める第3次産業の割合は84.4%となり、全国の74.2%と比べて高いほか、都道府県別では東京都に次いで全国第2位の高い数値となっています。

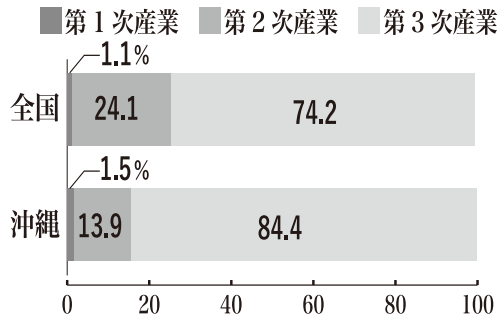
県経済の発展に不可欠といえるサービス産業の活性化について、昨年8月、経済産業省は「おもてなし規格認証」を創設しました。主に製造業を対象としたJISやISOといった規格認証のような、品質を評価する仕組みがサービス産業にはありませんでした。「おもてなし規格認証」制度はサービス産業の活性化と生産性向上を目的に、サービス品質を「見える化」する仕組みです。

サービス事業者は本制度に認定されることで登録証と認証マークが付与され、マークを持つ事業者はお客様へサービス品質をPRすることができます。既に県内でも宿泊業など約20事業者が認定を受けています。

認証申請では顧客満足、従業員満足、地域社会の満足を高めるために、事業者が実施している取り組みや今後実施したい取り組みを自己申告し、一定の基準に適合した場合、認定される流れになっています。サービス事業者にとって、他社や他店との差別化が図られるとともに、自社のサービス提供プロセスを把握することができるほか、サービス改善に取り組みやすくなるといったメリットもあります。ぜひ認証取得を検討されてはいかがでしょうか。

(沖縄銀行 泡瀬支店長 知念 伸幸)

産業構造の比較 (名目総生産に占める割合)



出所：内閣府「2013年度県民経済計算」
(平成29年1月8日掲載)

✦うるま市の創生総合戦略

企業、住民への浸透大切

うるま市は2005年4月に近隣の4市町(具志川市・石川市・勝連町・与那城町)が合併して誕生した、広範な市域と長い海岸線を有する人口約12万人の中堅都市です。沖縄本島側の市街地区以外に、平安座島・浜比嘉島・宮城島・伊計島・津堅島からなる島しょ地域を抱えています。人口推移では、市全体は増加傾向にあるものの、島しょ地域では著しい人口減少と少子高齢化が進み、市全体の傾向とは異なる状況がみられます。

16年3月に策定された市の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、市全体での「市人口ビジョン」と、島しょ地域に特化した「市人口ビジョン 島しょ地域編」の2点を前提に将来展望を描いている点が特徴です。特に島しょ地域における生活環境の基盤整備の遅れや、利便性、就業環境の不足などによる人口流出と出生数の低下が喫緊の課題として表面化していることから、島しょ地域に重点化した施策なども含まれています。

基本目標としては(1)魅力ある安定した雇用の場を創出する(2)本市への新しい人の流れをつくる(3)若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる(4)快適で安心して暮らせるまちをつくる—の四つが挙げられています。

地域資源の活用、生活環境の改善、雇用促進などさまざまな課題を乗り越えていくためにも、行政主導に頼るだけでなく、地域金融機関を含めた地元の事業者、住民が総合戦略を意識し広めていくことが大切ではないでしょうか。

(沖縄銀行 安慶名支店長 比嘉 秀史)

うるま市「まち・ひと・しごと創生総合戦略」

うるま市人口ビジョン	うるま市人口ビジョン 島しょ地域編
①安定した雇用の場を創出する	①若者の流出防止に向けた魅力ある仕事の創出を図る
②新しい人の流れをつくる	②域外からの移住を推進する
③若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる	③結婚・出産・子育て環境の充実
④安心して暮らせるまちをつくる	④生活環境基盤の充実

出所：うるま市まち・ひと・しごと創生総合戦略(2016年3月)
(平成29年1月15日掲載)

❖ 勝連半島「観光資源の現状と課題」

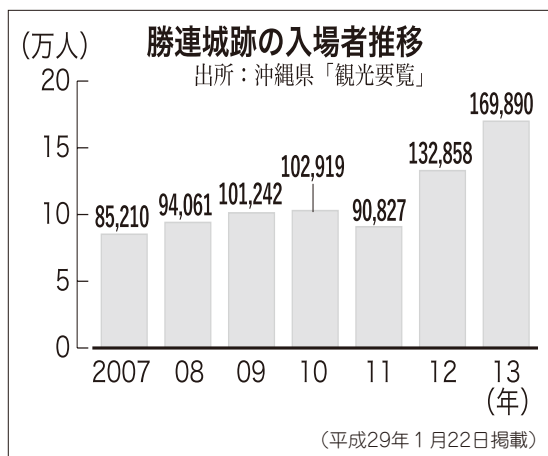
必要なガイド育成

勝連半島は本島中部東海岸に位置し、県内外から多くの観光客が訪れる注目スポットです。2000年に世界遺産登録された「勝連城跡」、勝連半島と平安座島を結ぶ全長4.75キロの「海中道路」、架橋で結ばれた宮城島や伊計島、浜比嘉島など、風光明媚な自然が多く残されています。また、勝連城の按司「阿麻和利」を主人公にした現代版組踊「肝高の阿麻和利」や伝統エイサー、天然モズク、シママース（塩）など、文化・食に通じた魅力ある地域です。

おきぎん経済研究所がまとめた「勝連城跡周辺文化観光拠点整備事業の経済波及効果」によると、勝連城跡から海中道路および周辺離島エリアには毎月約3万人が訪れ、年間35万人を超える規模です。内訳としては、勝連城跡の入場者数は統計を取り始めた2007年の約8万5千人から13年には約17万人と倍増しているほか、海中道路に立地している「あやはし館」には月平均1万7千人が来場するなどにぎわいを見せています。

好調な沖縄観光を背景に、今後も同エリアの観光需要増加が見込まれるなか、歴史的な資料・伝統文化・史跡の保全に加えて、周辺環境の整備として観光ガイドの育成や地域特産物の販路拡大などの課題があります。勝連城跡周辺文化観光拠点整備事業に約80億9千万円の事業予算が計画され、雇用創出や地域経済の活性化が期待されています。地域金融機関も、行政・地元企業・住民と連携を図りながら積極的に関わっていきたいと思います。

(沖縄銀行 与勝支店長 津波古 雄二)



❖ 個人型確定拠出年金

対象拡大、活用しやすく

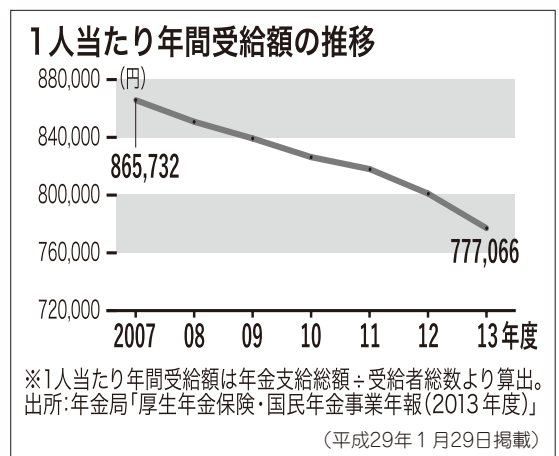
1月から個人型確定拠出年金 (individual-type Defined Contribution pension Plan、愛称イデコ) の加入対象者が拡大されたことが新聞紙面などで話題を集めています。厚生労働省の「個人型 (確定拠出年金) の加入者数の推移」によると、加入者は2016年3月末には前年比で4.5万人増加の25.7万人と増加傾向が続いています。

背景には、少子高齢化に伴う年金受給者数の増加などにより、1人当たり年間受給額が減少していることが挙げられます。厚生労働省の「公的年金受給者数・年金額」によると、07年度の受給者数約5.5万人が13年度には約6.8万人と1.3万人も増えた半面、1人当たりの年間受給額は、07年度の約86.5万円から13年度には約78万円と9万円近く減少しています。

こうした状況に対応すべく「確定拠出年金」は公的年金に上乗せして給付を受ける「私的年金」の一つとして活用されてきました。これまで加入者が限定された「個人型」は、現在は基本的に全ての方が加入でき (1) 掛け金が全額所得控除される (2) 運用益が非課税である (3) 受領時の税制優遇措置があるなどのメリットがあります。

今後も公的年金の受給については厳しい状況が続くと予想されることから、今回の加入対象者拡大を機会として、より豊かな老後生活の実現に向けてイデコの活用を検討されてはいかがでしょうか。

(沖縄銀行 宜野湾支店長 下里 浩正)



ゆがふ編集後記

無限の可能性 オキナワのリゾート

このコラムの先月号で「観光と地政学リスク」について問題提起をさせて頂きましたが、今回は一転、表題の通り「無限の可能性 オキナワのリゾート」というテーマです。

きっかけは懇意にさせてもらっている(株)アレックスの外間晃氏が『なぜ、世界のお金持ちは、こっそり「おきりぞ」を楽しむのか?』という著書を発刊(5月発売東邦出版(株))され、読んで、いわゆる目から鱗が落ちた状態になり、沖縄の未来にワクワクしたからです。

著者の外間氏は、長年商業施設のデザインに携わり、週中は那覇市内で仕事をこなし、週末をヤンバルで過ごすというライフスタイル(なんと羨ましい)をかれこれ20年以上続けておられ、著書ではその目で見た沖縄の将来像を大胆に発信されています。氏曰く、沖縄は観光地ではない、最強のリゾート地である、既に世界の超セレブがプライベートジェットやヨットなどでこっそり沖縄を訪れており、それは彼らが沖縄に相当な魅力を感じているからで、当の県民がその本当の魅力にまだ気づいていない、と述べています。

氏は仕事柄、建築デザインの視察などで年に数回海外に出向き、世界中の観光地やホテル・宿泊施設をよく訪れているそうですが、その彼にして沖縄はすでにアジアナンバーワンのリゾート地である、と断言されています。観光地とリゾート地の違いですが、曰く、リゾート地とは訪れた人がゆったりと時間を使う場所であり、周遊や観光地めぐりが主体の「観光地」とはちがう。リゾート地と呼べるにはある一定の条件があり、自然、名所旧跡、歴史、街の美観、ビーチ、快適な温度、治安、公衆衛生、物価、電気・水道などのインフラ、ホテル、住民のオープンマインド、食文化がすべてそろって成り立つもので、アジアで最上の場所は沖縄だ、と太鼓判を押しています。ほかのアジア諸国では一流といわれるホテルでも衛生面や、治安面、ちょっとした心遣いなど、やはり足りないところがあり、ジャパंकオリティの一角をなす沖縄にはなかない、との事です。

また、沖縄のイメージといえば青い海、青い空ですが沖縄にはヤンバルの森、そしてまだまだ未開拓の無人島が数多く存在する。沖縄はまさに宝の宝庫、無限の可能性があり、あえて沖縄のライバルを挙げればそれはバリ島なのだから。私も以前訪れたことがあります。まさに同感でした。バリ島の魅力はなんといっても日々の暮らしの中で神々との共存を感じさせる強烈な文化だと思えます。その魅力に世界中の人々が吸い寄せられますが、そのバリ島の独特な文化に一步も引けをとらないのが沖縄の文化でしょう。独立王国としての歴史、アジアとの交流を通して育んだ文化、島唄・サンシン・エイサー・組踊りなど独自の歌舞音曲、島々に点在する古琉球の城郭遺跡、スピリチュアルスポット、そして戦後の米国統治や海外への移民を通じて形成されてきたチャンプルー文化と特異なキャラクター。どれもこれも異彩を放つ「4番打者クラス」です。一番の問題は、旅行者なら誰でも知っている、この沖縄の魅力を、当の県民の多くが、まだ気づいていない、とのことでした。

(株)おきぎん経済研究所 代表取締役社長 出村郁雄)